

農×地域シンポジウム

# 未来を耕す

～これからの農と地域を考える～



取り組みと成果のまとめ

2023年3月18日

つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会



はじめに

2023年2月18日(土)、京都府南丹市にて「農×地域シンポジウム 未来を耕す～これからの農と地域を考える～」を開催しました。このシンポジウムは、「農」を切り口に地域住民や移住を考えている人などが集い、出会う場を作ることで、課題や経験を共有し、また多様なありかたを認識することで、今後の持続可能な「農と地域」の姿を一緒に模索していくためのきっかけをつくることを目指しました。


南丹市に限らず、日本各地の中山間地では、長い年月をかけて培われてきた農の営みや里山、農村環境を維持していくことが難しくなっています。高齢化や少子化、都市部への人口流出などによる担い手の急激な減少が大きな要因としてありますが、中山間地における「持続可能」な地域の在り方を考えれば考えるほど、複雑に問題がからみあい、それらを切り分けて個別に取り組んでいくことは持続していくことができる姿にたどり着けないということがわかります。移住者や関係人口を含めた担い手をふやしていくこと、地域の中でできることを模索していくこと、異業種・異分野が協

力しあうこと、それらの取り組みに必要なサポートが適切に提供されること、そのようなことを行政や関連機関、団体だけではなく、広く課題として個々が認識し、協力しあって動き出すことができる土台を作っていかなければなりません。シンポジウムのタイトル「未来を耕す」、そして以下の呼びかけ文には、多様な考え、経験、立場を持つ人たちが、多様なビジョンを持ち合って集う、そんなはじまりの場を一緒につくってこう、という思いをこめました。

シンポジウム当日は、南丹市内と近隣の他府県、遠くは関東を含む市外から約半数ずつ100名を超えるご参加があり、関係者を含めると約130人もの人々が集まってくださいました。会場のあちこちで初めて会う人同士で会話がはずみ、真剣に話に聞き入り、また積極的な意見交換が行われていました。この冊子を通してこのシンポジウムを振り返ると共に、今ここから始まる未来を皆さまと一緒に考え、持続可能な地域において協働していくことができるよう、心より願っています。

つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

ドワイヤーはづき



### 未来を耕す

豊かな森、田畑、里山の暮らしが息づくこの南丹。  
5年後、10年後、そしてその先、どんな風景にしていきたいですか。  
地域の人も、移り住む人も、訪れる人たちも、  
春を待つこの日、農と地域について一緒に考えてみませんか。



## 目次

1. 背景と経緯	4
南丹市の「農」に関する状況	
南丹市における移住と農のサポートの取り組み	
農×地域シンポジウム	
2. 開催の詳細	5
実施日程	
講師・登壇者プロフィール紹介	
3. 内容のまとめと登壇者からの声	8
基調講演	
事例発表	
テーマ別分科会	
①南丹市の農業：地域×行政	
②森林と農村：里山を守れるか？！	
③オーガニック農業：新規就農でどう？	
④農×移住：話したい人集まれ！	
パネルディスカッション	
4. 参加者アンケートの集計	21
5. シンポジウムを終えて	24
6. 資料	25
P 6 参加者数とその内訳	
P 9 若い世代からの声	
P23 農×地域シンポジウム実行委員会メンバーから	
P24 農×地域シンポジウム運営にご協力いただいた皆さま	
P24 農×地域シンポジウム実行委員会	



後援：南丹市、京都新聞、京都信用金庫  
協力：なんたんこれから会議

この事業は「令和4年度京都府地域交響プロジェクト交付金」  
を活用しています。

この冊子およびシンポジウムに関するお問い合わせ

つむぎ 担当：ドワイヤー はづき

E-mail：[tsumugi.nantan@gmail.com](mailto:tsumugi.nantan@gmail.com)

HP：<https://tsumugi-kyoto.net/>



## 1. 背景と経緯

### 南丹市の「農」に関する状況

京都府南丹市は、2006年に4町(美山、日吉、園部、八木)が合併し、東京23区とほぼ同じ面積である616km<sup>2</sup>の広大な地域に約3万人が住んでいます。豊かな森や里山の環境が維持されている農村地域も多くあり、街のエリアは京都市内からのアクセスが良いという利点がある一方、全体では高齢化率が35%以上あり、人口減少による様々な課題にも直面しています。

「農」の観点からみると、南丹市の北部に位置する美山町と日吉町、そして、市役所所在地である園部町の西部の農地は典型的な中山間地にあり、大規模な圃場整備ができないエリアであるため、農の担い手が急激に減っている地域でもあります。これらの地域では、「農」だけでなく集落機能全般の担い手が減少しており、規模の違いや専業と兼業など様々な形で多くの住民が農や関連する幅広い作業に携わることで維持さ

### 南丹市における移住と農のサポートの取り組み

このような課題への対策として南丹市では、移住促進におけた空き家バンク等の設置が進み、2015年には定住促進サポートセンターが設置されるとともに積極的な取り組みが始まりました。

このシンポジウムの主催団体である「つむぎ」は、2012年ごろより同市に移住した移住者がその経験を活かし、当事者目線で必要だと感じた、移住・定住のための情報をガイドブック「楽しい移住～京の里山なんたんで、であう、つくる、つながる暮らし～」(2019年3月発行)にまとめました。農地の取得の方法や農業を始めるための情報を冊子に盛り込んだこともあり、ガイドブックの発行後、移住をして「農」に取り組みたいという人たちからの相談を受けるようになったことをきっかけとして、2021年に「農×移住」フィールドおよびオンライン講座を開始しました。自給

### 農×地域シンポジウム

このような背景の中、つむぎと、「なんたんこれから会議」(2022年発足)に集う有志が実行委員となり、「農」を切り口に中山間地が抱える課題を多様な立場から考える場としてこの農×移住シンポジウムの開催が決定されました。このシンポジウムは、農と地域の課題に取り組む地域団体、農業者を含む地域住民、行政、そして、農×移住に関心のある移住希望者が出会い、お互いを知り、課題を共有することで未来へ向けた取り組みのきっかけの場となることをねらいとしました。実行委員自体が多様な立場から集ったメン

れてきた森林や農地を含む里山環境の土台である農村が今後どうなっていくのか、と危惧を抱かせる状況になっています。また、シカ、イノシシ、一部地域ではサルも含まれる野生動物による獣害も増え続けており、さらに「農」の営みの維持を難しくさせています。

南丹市の農業の現況は、2020年の南丹市農林業センサスによると、農家戸数は5年前比で384戸減(13.7%)の2,420戸(販売1,535戸、自給的農家885戸)、そのうち仕事として主に自営農業に従事している基幹的農業従事者数は1,446人となっており、平均年齢70.2歳、65歳以上が1,218人と全体の84.2%を占めています。また、後継者がいない農家は1,066戸で、全体の66.6%となっています。

用に田畑をしたいという人から、将来的に営農を目指しているという人まで幅広い層を対象に、実際に地方の農村で「農」を始める時に必要となる知識やスキルを学んでもらうことを目的としたフィールド講座は、南丹市(農業推進課および地域振興課)や、南丹市農業委員会、地域の森林組合や農業者グループからの講師派遣などの協力を得て、2年間で南丹市内4地域にて開催しました。この講座には40名以上が近隣都市や関東からも南丹市を訪れ、実際に移住や定住につながったケースや、講座後に地域団体の活動に参加する人も出てきています。同時に、南丹市も2022年1月から新たに農に関わりたい人たちのための相談窓口として「南丹市参農サポートセンター」の試用を開始し、営農を目指す人だけに限らず、幅広く農の担い手におけたサポートの提供を始めています。

バーであり、シンポジウムを作り上げるプロセスの段階からすでにこのねらいの実践の場が始まったと言っても過言ではありません。





## 2. 開催の詳細

このシンポジウムを企画するにあたって、実行委員会での話し合いや関連の取り組みをしている方々からお話を聞くことを重ねていく中で見えてきたことは、地域づくりや農の担い手育成、移住促進に取り組んでいる人々、そして、新たに農に取り組むことや移住する事に関心を持っている人々がお互いの求めていることや疑問に思っていることなどをよく知らないままに物事をすすめようとしていることから、さまざまなミスマッチがおきているのではないかということがありました。それは、移住者と地域住民のことでもあり、また、農の観点からいうと、例えば慣行農業と有機農業のことでもあり、様々なサポートという点では、行政と地域や団体等のことでもあります。また、中山間地での農ということでは、森林や水源についても切り離しては考えられないことであることも話し合われました。広大な地域でそれぞれ独立していた4つの町が合併してできた南丹市だからこその状況としては、同じ市内で同じような課題を抱え、取り組みをしていますが、また参考になる事例があったとし

ても、それらが共有しきれていないのではないかと、ということも見えてきました。

「これからの農と地域」という課題は、現状の高齢化率や、農をはじめとした様々な場での担い手の減少から、5年後そして10年後の状況に危機感をもちつつも、20年、30年、それ以上の時間をかけて、できるだけ多くの、多様な人々が一緒になって取り組んでいく課題であるということ認識したうえで、その第一歩として、まず関心のある人々が出会い、話し合い、知り合う場となるよう、このシンポジウムが形作られました。

これらの課題やねらいを基に、シンポジウムは、西川芳昭さん（龍谷大学経済学部）による「土の人（ずっと住んでいる人）」と「風の人（外から移り住む人）」の関係についての基調講演、南丹市内各地の「農」に係る取り組みの事例発表、そして、多様な視点から「農と地域」について考えることができる4つの分科会とまとめのパネルディスカッションで構成され、1日をかけて実施されました。以下はシンポジウムの実施日程と講師及び登壇者のプロフィールです。

## 実施日程

### 農×地域シンポジウム「未来を耕す～これからの農と地域を考える～」

日時：2023年2月18日（土） 会場：南丹市日吉生涯学習センター（遊 you ひよし）ホールおよび会議室

開会 10：00～

1. 基調講演 「『風の人』の目で見た農と地域の未来」 西川 芳昭さん（龍谷大学・経済学部）
2. 事例発表 11：10～ 「下区の農業と変化と現状」 澤田 利通さん（美山町下農事組合長）  
「めざせ！農家あぜみち会議」 下間 康広さん（園部町南八田）  
「農×移住フィールド講座」 ドワイヤー はづき（つむぎ）

#### ◆昼休憩◆

3. 分科会 13：00～

- ① 南丹市の農業：地域×行政 西村 寿さん（NPO 法人摩気高山の郷振興会）  
& 福井 克己さん、藤原 正昭さん（南丹市農業推進課）  
ファシリテーター：友前 尚子さん（こんこんひろば）
- ② 森林と農村：里山を守れるか?! 堀田 暢さん（日吉町森林組合）  
& 塩貝 孝之さん（南丹市猟友会、兼ファシリテーター）
- ③ オーガニック農業：新規就農でどう? 鈴木 健太郎さん（一社・京都オーガニックアクション/  
有機農産物物流、兼ファシリテーター）  
& 児島 ひかるさん（京のベジ/有機農家）
- ④ 農×移住：話したい人集まれ! 吉田 宙斗さん（南丹市参農サポートセンター）  
& 前田 敦子（つむぎ）  
ファシリテーター：高橋 博樹さん（なんたんこれから会議）

4. パネルディスカッション 14：50～

5. 閉会 15：50～

終了 16：00

## 基調講演

### 『風の人』の目を見た農と地域の未来

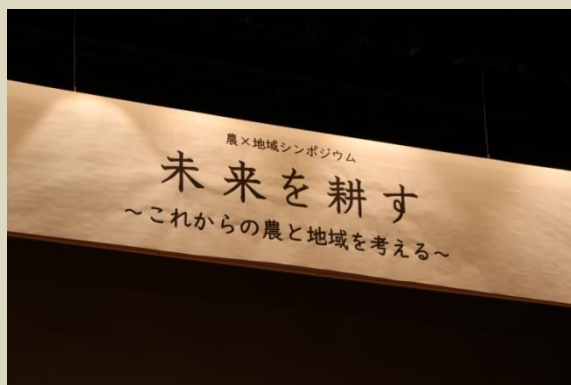
にしかわ よしあき

西川 芳昭さん

龍谷大学教授（農業・資源経済学／民際学）

1960年奈良県のタマネギの採種農家に生まれる。京都大学農学部農林生物学科卒業、バーミンガム大学生物学研究科／公共政策研究科修了。国内及び海外数十か国で農村振興・参加型資源管理について調査研究と行政・NGO等への指導を実施。国際協力事業団（JICA 現国際協力機構）・農林水産省・名古屋大学等を経て現職。

主著：『地域文化開発論』（九州大学出版会）『食と農の知識論』（東信堂）以上単著・『生物多様性を育む食と農』（コモンズ）『タネとヒト 生物文化多様性の視点から』（農山漁村文化協会）以上編著・『地域の振興』（アジア経済研究所）（共編著）等



## 事例発表

### 「下区の農業の変化と現状」 澤田 利通さん

さわだ としみち

美山町下区出身・在住。職業は農業。美山町下農事組合長、下集落支援事業委員会事務局長を担う。美山町下区は集落支援事業として伝統食づくりや地域の歴史掘り起こしなど様々な集落活性の取り組みを行い、令和4年度、第61回農林水産祭において「豊かなむらづくり部門」の内閣総理大臣賞と農林水産大臣賞を受賞した。

### 「めざせ！農家あぜみち会議」 下間康広さん

しもつまやすひろ

園部町在住。農業高校卒業後、社会人を4年経験したが、はっきりとしたやりがいを感じたく就農。地域での畑を預かり、規模拡大していく中で、人や地域との関わりに幾度となく助けてもらい、繋がり大切さを実感した。高齢化が進む農業分野の中で繋がりを大切にしたアクションを起こしていきたい。

### 「農×移住フィールド講座」 ドワイヤー はづき

神戸市出身、日吉町胡麻在住。移住サポート市民団体「つむぎ」共同代表。当事者としての視点を活かし、移住や小さい農を始めるための情報発信や講座を開催している。こどもと一緒に田畑や森をおもいきり楽しむ「さとやまさんかく」も展開中。

## 参加者数とその内訳

南丹市内からの参加者	57名
南丹市外からの参加者	45名
（内、大学生	16名）
合計	102名

市外からの参加者の多くが京都府内や近隣他府県からのご参加でしたが、遠くは東京や群馬からお越しいただいた方もありました。また、ご講演いただいた西川芳昭さんの龍谷大学でのゼミ生の皆さん以外にも、複数の大学生のご参加があり、分科会等でも活発に発言し、交流する姿が見られました。



## テーマ別分科会

### ①南丹市の農業：地域×行政

にしむら ひさし

#### 西村 寿さん

南丹市園部町出身。NPO 法人 摩気高山の郷振興会 副理事長兼事務局長。2011 京都府を退職後、2016 年「摩気高山の郷振興会」の設立と同時に理事に就任。2018 年に副理事長。現在は併せて、農業に従事。

ふくい かつみ

#### 福井 克己さん

亀岡市出身。旧園部町役場入職後、土木管理課、秘書広報課等を経て、現在は南丹市農業推進課・課長補佐（農業政策担当）。兼業農家。

ふじわら まさあき

#### 藤原 正昭さん

南丹市美山町出身。旧美山町役場入職後、道路河川課、教育委員会等を経て、現在は南丹市農業推進課・課長補佐（農業土木担当）。兼業農家。

ともまえ なおこ

#### 友前 尚子さん

兵庫県伊丹市出身。園部町在住。2015 年に食・農・文化について地域と人と世界とをつなげて考える「こんこんひろば」を設立。開発教育セミナー、ワークショップなどを企画・運営。

### ④農×移住：話したい人集まれ！

たかはし ひろき

#### 高橋 博樹さん

大阪市生まれ。2012 年 NPO のよろず相談所「NPO 法人テダス」を設立し NPO の活動支援を開始。南丹市まちづくりデザインセンター、京田辺市立南部まちづくりセンターのまちづくりアドバイザー。京都府移住定住促進セミナーのファシリテーター。各地域での集落の教科書づくり。

よしだ ひろと

#### 吉田 宙斗さん

兵庫県出身。食品加工メーカー、福島県の農業生産法人にて 30ha 規模の大規模甘藷栽培を手がけた後、2019 年に地域おこし協力隊制度を活用して南丹市へ移住。美山にて さつまいも栽培を中心とした吉田農園を開業。2022 年からは南丹市参農サポートセンターで相談員も担っている。

### ②森林と農村：里山を守れるか？

ほりた とおる

#### 堀田 暢さん

大阪府八尾市出身、日吉町中世木在住。日吉町森林組合の森林施業プランナーとして、森林の調査、計画、所有者への施業提案に取り組む。休日には、所有する山林をこどもの遊び場として整備し開放するほか、森林空間を活用したい他団体への助言も行う。薪活も。

しおがい たかゆき

#### 塩貝 孝之さん

南丹市園部町出身在住。京都府猟友会相談役・南丹市猟友会顧問・大堰川漁業協同組合理事。小規模ではあるが農業に従事し、有害鳥獣により田畑を荒らされる自身の経験から狩猟を始める。故郷を守り、未来ある次世代のために「みんなが楽しい南丹市」を目指し南丹市議会議員としても活動中。

### ③オーガニック農業：新規就農でどう？

すずき けんたろう

#### 鈴木 健太郎さん

神奈川県出身、南丹市園部町在住。宅配型オーガニック八百屋「369 商店」オーナー、(一社) 京都オーガニックアクション代表理事。ナリワイを通して、有機農家どうしや、生産と消費をつなげ、地域の循環をつくっていくことなどに取り組んでいる。

こじま

#### 児島 ひかるさん

兵庫県高砂市出身、南丹市園部町在住。オーガニックファーム京のべじ代表、有機農家。2008 年から大分と奈良で有機農業の修行をつみ、2012 年に南丹市に移住して以降、新規就農者向けの研修を経て 2016 年から独立。現在、ハウス 10 棟と 2 町の田んぼで有機栽培のお米、トマト、春菊、レタスを栽培している。

まえだ あつこ

#### 前田 敦子

石川県出身、日吉町中世木在住。自然・登山ガイド。南丹市地域おこし協力隊一期生として移住。「つむぎ」で移住者目線の移住ガイドブック『楽しい移住』を作る。現在は自宅を農家民宿「ふくろのねこ」として縁側カフェや伝統の技ワークショップ、自然観察会などを開催している。

農×地域シンポジウム

未来を耕す ~これからの農と地域を考える~



### 3. 内容のまとめと登壇者からの声

シンポジウムの日程に沿って、講演や発表の内容、分科会でのお話やディスカッションなどについて、また、登壇者の方からシンポジウム開催後にいただいたコメントを以下にまとめます。

## 基調講演

『風の人』の目で見えた農と地域の未来 西川 芳昭さん（龍谷大学・経済学部）

### 概要

**ネガティブケイパビリティ（消極的受容力）**：すべての物事が解決できるものではないということを受け入れる能力のこと。「要点をわかりやすく」やハウツーもの的な発想が社会の行き詰まりを招いており、それらに未来を創造する力はないと考える。現代人に最も必要とされていることは「共感する」ことであり、それが熟成する過程で、容易に答えが出ないことに耐える力をつけていくことが重要。このエッセンスは未来を作るうえでとても大切。

「土の人」と「風の人」：その土地にずっと住んでいる土の人と、外からやってくる風の人では、そもそもものの見方が違うため、同じものでも違うものを見ている。重なる部分がないということ为前提として、お互いに学ぶ、良い意味で土の人が風の人を利用するというような関係性の中で地域をよくしていくことを考えるということ。「地元学」では土の人だけでは地域が持っている良さに気が付きにくく、外の人と一緒にやっていくことですでにある本来の地域資源の価値を認識できるとしている。人が幸福を感じるかどうかは、その人の価値判断が伴うため、金銭以外の多様な基準や指標を考慮していくことも農村振興の中では大切。一部企業等、地域を活かさない地域資源の利用もあり、必ずしも風の人が良い人とは限らないということもある。

**地域の事例**：長野県で学生たちが地域MAP作りをしたことで、参加者側は地域における住民の行事等への強制的な参加の実態の難しさを学んだが、地域の人からは高齢者の態度が軟化し、住民のカバランスにも変化があったという感想が出た。長崎県の小値賀では、「島で出産できないのはおかしい」とザンビアから来た女性医師の発言をうけて、住民の女性が「本当は自分の娘にも島で子どもを産んでほしかった。言いたくても言えなかったが自分の意見をもっと出しておくべきだった」と初めて気持ちを吐露したことがあった。町や村を元気にしていくには、当事者作りが重要だが、その当事者の意識に変化をもたらすのも風の人と土の人との出会い。こういった交流は人材育成そのものだと見える。

**寛容**：興味をもたないということではなく、否定的に受け止めていることであっても認めるということ。風の方は覚悟を決めていく必要がある一方、土の方も、聞きにくいこと、いいことだけではない意見に対して、まじめに真剣にかかわろうとしている意見を受け止めていくということが、未来を築いていくためには必要な姿勢。見え方、生き方が違うのだから意見も違うことを前提として出会っていく、違いをみとめていくことでしか未来を作っていくことはできないのではないかな。

Q. 「風の人」は何年住めば「土の人」になれますか？  
また移住した先に長く住むには何に気を付ければよいですか？

A. これは関係性のことなので年数の定義があるわけではなく、4~5世代その土地に住んでいれば土の人という感覚ですが、どちらもの性質を持った人というのもあると思います。

寛容というのは、否定的に評価する物事であってもそれを認める、ということ。同じものを「好き」だとしてもその「好き」の在り方が違うということを確認合う必要があります。気に入らないことがあることを前提として向き合うことから始めることです。





## 若い世代からの声

このシンポジウムでは、龍谷大学・西川ゼミの2年生で、特に南丹市での取り組みに関心を持ってくれた学生3名にインターンとして当日の運営や記録のサポートをしていただきました。他にも同じゼミの学生が複数参加し、シンポジウム後、当日の学びへの感想や学生ならではのアイデアなどを寄せていただきました。これら若い世代からの声を「学生から」として各所に掲載しています。

### 登壇者から：西川 芳昭さん

この度は「農×地域シンポジウム 未来を耕す」にお招きいただき有難うございました。

4町が合併してできた南丹市において、多様な地域に住まう方たちが、違った立場にありながらも、地域の未来という共通のテーマについて語り合う場に同席させていただけたことを改めて感謝しています。

移住促進や地域活性化という、ともすれば、短期的な経済的側面や補助金目当ての事業が目立ってしまいがちですが、「みんな南丹市をよくしようと思ってるんやから、ここに集うみんなで、なんか一緒にやろう」という関係性が原点だという議論ができたのかなと思います。事例報告や分科会における具体的な情報のやり取りが大きな目的だったでしょうが、活動を見直す枠組みとして「風の人・土の人」という観点があることも知っていただけたと期待しています。

農林業が生命体を採取・栽培・飼育するという基本的特質を持つことから、これらの生業を基盤とする地域の未来は土地から切り離すことが難しいです。そのためには、「場」を活用する必要がありますが、「土の人」（地域に根付いて生きてきた人）と「風の人」のモノの見方は違うため、いっしょに物事を進めるためには、それぞれの人の異なる観かたの中に重なりを見つける必要があります。

今回のシンポジウムをこれまでの活動の<sup>すいてん</sup>萃点（出会いの場）として、また多様かつ具体的な学びや活動に繋がっていくことを期待しますとともに、私自身もそのような集まりの中に加えていただけたらと願っています。



### 学生から：

基調講演から得た学びは・・・

- ・ 風の人と土の人とはモノの見方が違うということを理解しておくこと
- ・ 地域資源は何が足りないかではなく、私たちは何を持っているかということが大切なこと
- ・ 外からの目線で地域の魅力の再発見や地域の改善をしていくことも重要である
- ・ 相手にとって失礼にならないような言動を心がけるが、時には自分の意見を言うことも大切
- ・ 出来る、出来ないで考えるより、まず先にこんなこと出来ないかなと興味を持つことが大切
- ・ 土の人と風の人との異なる見方を重要視する
- ・ 風の人が必ずしもいい人ではないことを理解しておく
- ・ インターネットで調べて出てくる言葉だけじゃなくて実際の農家の人たちの言葉を大切にしようと思った
- ・ 自分たちの活動の視点と外の人たちから見た視点の両方を取り入れる点

「下区の農業の変化と現状」 澤田 利通さん（美山町下農事組合長）

**概要** 美山町下区で集落活性化のために農業、食文化、伝統文化、交流のチームに分かれ集落全体で取り組んできたことが内閣総理大臣賞を受けた。昭和59年の圃場整備直後から、田植え機とトラクターの共同化、オペレーターによる集落農地の維持、運営を実施。個人では守り切れなかったであろう農地を農事組合で維持してきたが、高齢化と後継者問題に直面している。厳しい自然環境や獣害など課題は多いが、農業をしたいという人まずはじっくり相談をしにきてください。「田んぼは四角、心はまるく」の気持ちで他所からも来てもらい、代々続いてきた農地と元気な集落を残していきたい。



「めざせ！農家あぜみち会議」 下間 康広さん（園部町南八田）



**概要** 仕事へのやりがいを感じたいと思い、大変だけど楽しそうに農業をしている両親の姿を見て専業農家に転向。大変だった時期は常に周囲の人から助言などを貰い助けてもらっていた。地域の役に立ちたいという思いから、耕作放棄地を畑として請け負い、地域内や外からの人も交流できる場作りにも取り組んでいる。信頼できる人間関係を作り、理解し合える場作りが必要だと感じている。昔は普通にやっていたあぜ道で日々顔を合わせ、小さな集まりで会話する、そんなことをまたみんなでやっていきましょう！

「農×移住フィールド講座」 ドワイヤー はづき（つむぎ）

**概要** 移住者目線で南丹市への移住ガイドブックを作った市民団体つむぎが、担い手が必要な地域と田畑をやりたい人をつなげられないかと2年前から“小さい農”をするための知識とスキルを学ぶ講座を開始。農法ではなく、農地を扱う際の法的なルールや、地域との協調の必要性、草刈りなどの必須のスキルを学ぶことができる内容。農業委員さんや農家の方、行政職員さんに講師になってもらい、地域の人から直接学ぶことで地域に根付いた学びができるようにしている。農を通して顔の見える関係性を作っていくお手伝いをしていきたい。



登壇者から：澤田 利通さん

シンポジウムでの発言の機会を与えて頂き、ありがとうございました。牛をムチ打って耕していた時代から、耕地整備、大型機械の導入そして今、スマート農業に大きく変貌してまいりました。しかし、我が住む美山町下区も少子高齢化の波は避けられない現状であり、かろうじて荒廃地がでないよう、農事組合で守っています。個々の農家を見たとき、後継者や担い手の問題が現実化しており、今後、農事組合の存続も危ぶまれています。今回の機会に、移住と農業を一体化し集落の農地を守っていく為「土の人が風の人」を迎えられるように区民に理解を求める様、努力してまいります。

今回のシンポジウムは、大変意義深い内容でした。これから先、集落すら無くなる状況下、ど田舎でも、土あり・水あり・きれいな空気のなかに移住される事を願っております。

分科会では④の「農×移住：話したい人集まれ！」に参加し皆様の意見をお聞きしました。はじめは中々意見が出せませんでしたが、南丹市に移住された方の意見やすでに農地を借りられ成功された方のお話がありました。大勢おられました。南丹市はいいなあ、移住したいなあと思える方が大半だったと思います。次回このような機会があれば各ブースを設けて、個別相談(面談)ができれば具体化できたと思います(南丹市定住促進および参農サポートセンターも含め)。また事前に地域の空き農地や住宅情報も参加の皆さんに提供出来たらいいなあと思いました。



### 学生から：

下区の農業の変化と現状について理解が深まって、より農業の高齢化などの問題がイメージしやすくなりました。

また地域を発展させるために、農業、食文化、伝統文化、交流チームの四つに分かれて課題解決に取り組んでいる事を知りました。自分だったら、交流チームとの関わりで、地域とヒトを結びつけることならば出来ると思ったし、今後そのようなことが出来たらいいなと思いました。

### 学生から：

サラリーマンをしていたが、退職し農業の勉強を始めたが全く収入減がなく、当時有望株であった枝豆を育て始めた。そんなふう集落には新規就農者や地域の外から来る人達がたくさいる。そんななかでみんなの考え方が違って当たり前という言葉がとても心に残った。理由としては必要になってくのが理解し合える場と言われており、結局最後はコミュニケーションがどこの世界でも大切なんだと感じたためである。

### 登壇者から：下間 康広さん

未来を耕すシンポジウムに参加していただいた皆さん、実行委員会や関係各種の皆さん、本当にお疲れさまでした。本当に貴重な体験をさせていただきました。

私事で申しわけありませんでしたが、一人の農家として近年ももんとしていた事の事例を報告させていただきました。何度も言いますが、私は「つながり」にずっと助けていただきました。しかしいろいろな事情で「つながり」が薄くなってきている感じがし、このようなシンポジウムで発言させていただけたことに感謝をしています。

「つながり」とは地域もあり個人・団体もあり、そして年齢や性別も問わない大切なものです。農をきっかけとして、様々な関係の小さな「つながり」を作り、いずれ大きな輪になれば素晴らしいと思います。

昔からあった「あぜ道会議」も、ぜひ皆さんの地元地域で少し意識して、会話のきっかけづくりにしてみてください。私も、いろんなところであぜ道に腰掛けながら話し合いを楽しみたいと思います。

そして今回、シンポジウムに参加された方や関わられた方たちによって少し未来は耕されたと思いますので、次回はそこに種をまき、何らかの芽が出ることを大いに期待しています。ありがとうございました。

### 登壇者から：ドワイヤー はづき

「田畑を耕し、地に足の着いた暮らしをしたい」と東京からこの南丹市に移住して11年になります。知り合いもない土地で温かく迎えてくれる人たちに出会い、遠出すると「ああ、帰ってきた」とホッとできる風景ができ、お米と少しの野菜を自給できる農地とくらしの土台を得て今、丁寧な人の手が入ってきたからこそ維持されてきた農村と里山の姿がこれからも続いていくことを心から願ってやみません。地域の事も、これまでの苦労もよく知らない「風の人」である移住者がそんな願いを口に出しても良いものか迷いながら、また、そんな移住者が増えることは現在、日本の地方農村が直面している様々な課題への解決策のほんの一つでしかないであろうとも思いながら、それでもやはり、いのちを育む大事な仕事である農と、それを営む人々、環境、暮らしをつないでいくことに関わっていきたくてシンポジウムを経て思いを新たにしています。

事例として発表させていただいた「農×移住」講座は、自給から営農を目指す人まで幅広い人を対象とし、実際に農村で田畑を始めるときに必須となるスキルと知識を得ることができるよう考えました。しっかりと営農ができる農業の担い手育成はもちろん重要ですが、販売はせずとも様々な規模や方法で“農”に携わり、日々の草刈りや、水路の管理、台風等の災害後の復旧など、農の営みに必要な環境の維持を協働で担うことができる人々が増えることも同様に重要なことだと思います。多様な人々からなる“小さい農”の担い手が「土の人」と共に耕し、汗を流し、集落に集う—そんな未来を描き、実践していきたいと思っています。

## テーマ別分科会 ①南丹市の農業：地域×行政

西村 寿さん（NPO 法人摩気高山の郷振興会）& 福井 克己さん、藤原 正昭さん（南丹市農業推進課）

ファシリテーター：友前 尚子さん（こんこんひろば）

- 資料
- ① 「南丹市農業の概要」 令和4年度南丹市農業推進課
  - ② 「スマート農業の展開について」 2023年1月農林水産省
  - ③ 「やりがいのある農業と村づくり」 NPO 法人摩気高山の郷振興会

- 内容
- ・ 資料①、②に沿って、農業推進課より南丹市の就農者の状況、主要作物、担い手育成のための支援策、スマート農業の説明などの説明
  - ・ 資料③に沿って、西村さんより農業法人による集落営農の仕組みとそのメリットについてなどの説明

### ディスカッション

Q. これまで農業に携わったことのない人が、農業のスタートを切ることがとても難しい印象。未経験でもやりたい人には何か補助があるのですか？

A. 行政が実施する新規就農者への支援を受けるには、年齢などの制限や、決められた期間で決められた利益を達成するための営農計画立てをし、認可されることが必要。営農を目指す場合は、まず農家に修行に行き、実践農場で経験を積むなど、学ぶことから始める必要がある。

Q. なぜ西村さんの地域ではこのような集落の農業の仕組みができているのか？他にもしている地域はある？

A. 集落で安心して農業ができる環境が必要ということと、圃場整備が終わったのちにその恩恵をどのように公平にみんなが受けることができるかを考えた結果、大西（園部町）では法人化し、ブロックローテーションによる集落営農の方法を実践している。集落営農のためには、コミュニケーションが大事。地域の代表や若手農家が話し合う場づくりを積極的にしている。国の政策のように大規模、効率化を進めることができない地域でみんなが協力しながら農業を続けていく方法。

Q. スマート農業のメリットは？

A. 効率的で便利ではあるが、それを導入すると人がいなくなり他に行ってしまう。年寄りにとっては操作が難しく扱えない。作業によっては導入している場合もある。

Q. これからについてどう考える？

A. 地域農業には色々なものを取り入れているのでしばらくは安定しそうだが、その後はどうか...

A. 子どもに農家をさせたくない、などグチばかり言ってもつらくなるので生きがいを感じてやっているところも見せていかないといけない。



### 登壇者から：福井 克己さん、藤原 正昭さん

分科会①「南丹市の農業」では、はじめに分科会の設定趣旨について主催者から説明がありました。南丹市への移住を希望される方が、市農業推進課に就農相談を断られたというエピソードから、「なぜ断られたのか？」「そもそも農業推進課はどのような業務をしているのか」等について、まずは知ることから始めてみようということで、この分科会は始まったとのことでした。

当課からは、農林業センサスのデータ等をもとに南丹市の農業の概要と農業推進課の業務についてお話ししました。とりわけ、本市における農家数の減少と高齢化は深刻である中、15年前に比べると30歳までの農業従事者数は増加し、また平均年齢が下がってきております。このことは、若い世代の新規就農者が増加していることを意味し、本市の農業に魅力を感じていただいた結果ではないかと感じております。

また、分科会の中では、西村寿さんから地域での営農組合の取り組みについてのお話があり、地域と行政の連携による持続可能な地域の農業への取り組みについて、参加者の皆様にもご理解いただけたのではないかと思います。今後も、農業者の皆様とともに、南丹市の農業がより充実するよう、業務に努めてまいります。



## 登壇者から：西村 寿さん

よくもまああれだけ大勢の方に集まっていたいただいたものだ。田舎で子育てを考慮しておられる方、移住して有機農業を目指したい方、自然の中で余生を送り自己実現をお考えの方など多くの方に南丹市まで足を運んでいただいたことに心から感謝申し上げます。

つむぎさんと私の交流は、昨年の夏から始まりました。私の住む摩気地域に移住され、つむぎの企画した講座を地域の受け入れ先として担当した人のお家でワークショップの打合わせをした時のこと。いきなり「小さい農業」ということばが飛び込んできて、話をするうち強く引き込まれてしまいました。農業の世界でも、大規模農業や効率一辺倒、成果主義などがややもすれば評価されがちなか中、「小さな農業」、「多様な生き方を認め合おう」を活動の中心に据えて活動されるつむぎさんの活動に心を動かされました。

今回のシンポジウムでは、私が住む地域の集落営農と閉校となった小学校をエリアとする NPO 法人の農地を保全する取り組みについて事例報告をさせていただきました。幸い分科会には、多くの方にご参加いただき活発な意見交換もできました。集落の住民と移住者（将来移住を考えておられる方）との心が通う交流に強い関心を持っておられることを再認識させられました。

農業法人が行う農業や NPO の活動は一見大規模農業や多数決主義で数字が物をいう活動のように思われますが、パネルディスカッションでキーワードとなったお互いの生き方や農業のやり方を認め合うことの基本となる「コミュニケーション」の重要性はどのような組織であろうと共通するものと信じています。今後、つむぎさんの活動が移住者の目線や南丹市で農業をやりたい方の立場で地道な活動を続けられることを願っています。今後とも一緒にやらせていただくことを願っています。

## ファシリテーターから：友前 尚子さん

地元出身（土の人）でもない、移住者（風の人）というのもしっくりとこない…。夫の実家のある南丹市で暮らし始めて約 20 年。いつも自分の立場を中途半端に感じながら地域活動に参加し、このシンポジウムでは実行委員をすることになりました。

実行委員会では、後継者不足、移住者と地元住民との壁、獣害被害などの様々な南丹市の「農」をとりまく課題が挙がりました。また、代々受け継がれてきた地域での農業、移住者が思い描く「農」、行政の取り組み、オーガニック農業など、「農」の多様性も見えてきました。そのようなことを踏まえ、「まずは知ることから始めてみよう」ということになったのです。

私自身、これまでも食と農に関心を持って自分なりの活動をしてきましたが、今回のシンポジウムで、様々な立場で「農」に関わる方々と出会ってお話を聞く中で、自分が生活する南丹市の「農」や「地域」について、まだまだ多くの知りたいことや挑戦したいことがあると感じました。未来を耕す取り組みに一市民として参加すること、今後の展開が楽しみです。土に根を張り、風に吹かれながら、「土の人」「風の人」の世界をつなぐ「草の人」としての活動を続けていきたいと思っています。



**学生から：**ディスカッションの中で農業を始めたい方が何から始めたらいいのかわからないとの質問が上がり、制度が複雑でややこしく土地を借りるにも支援を受けるにしても条件を満たさなければできないところが難点であると感じた。農業を始めるにあたって、まずどこかの農家で修行をしてそこから土地や機械などの資源を購入し、市役所または農業委員会の方へ行き審査を受け通ったらはじめて農家として認められるので、そこまでの一連のプロセスをセットでサポートするような制度があると始めやすいように思う。

堀田 暢さん（日吉町森林組合） & 塩貝 孝之さん（南丹市猟友会、兼ファシリテーター）

- 資料 ①「森林と農村～里山を守れるか？！～」 日吉町森林組合  
②狩猟と獣害に関する京都府と南丹市の統計等資料

- 内容 ・参加者から自分の活動についてなどの自己紹介やこの分科会で聞きたいことについて話す  
・資料①に沿って堀田さんより森林の役割や森林組合の仕事についての説明  
・資料②に沿って塩貝さんより、猟師や獣害対策の現状についての説明

ディスカッション

Q. 持っている森林/山の範囲がわからない場合や、森林組合に手入れを依頼する場合はどういう対応になるのか？

A. 移住で購入した物件に山がついてきたり、相続をしたけれどその山がどこにあるかも知らないケースはよくある。境界については把握していた人がすでにいない、地図と登記の内容が合わない場合も多く、今後さらに増えると予測している。把握できている人たちから聞き取りをし、手入れができるベースを早く作らなければならない状況。現在、戦後の植林を間伐して利用するという時期にあるが、組合員である持ち主さんの採算のこともあり、日吉町森林組合としては、より良い山にしていくため、相談があれば広い範囲をまとめて作業できるようにしてコストを下げるなどの提案をして取り組んでいる。

Q. 大雪の後など、道路沿いや家の裏手の山からの倒木が非常に危険な状態にある。なぜこうなのか、どうしたらよいか。

A. 戦後、切り出すことや採算を考えずに植えられる所すべてに植林したことに起因している。今後はきちんとしたゾーニングをして、根が張りやすいなどの環境の良いところは手入れし、倒木しやすく危険になる場所などは自然林に返していくというような住み分けをして管理してかなくてはならない。令和6年度から森林環境税が財源となる予定で、南丹市内でも必要な森林の整備ができるように調査が始まっており、今後、行政が対応の取りまとめをする事になっている。

Q. 農林業の課題を考える時、若者はキーマンとなるのでしょうか？

A. 林業は若者に人気が出てきている職業ではあるが（なぜか京都では下火）、離職率は高く、キツさや危険も共ない、地元からの就職が非常に少ない。地域の子もたちに森林の事を学んでもらう機会を増やしていくことや、山の遊び場作りなど、森林の多面的な利用のための補助金等をより活用しやすくし、より多くの人に関わることができるようになることも1つの方法だと考える。

A. 猟師も高齢化しており圧倒的に後継者不足。数年経験したくらいでは、熟練の猟師がもっている技能には到底及ばないが、年齢と共に事故の危険も増すのも事実。猟銃の免許取得は厳しい審査もあり、1年程度の時間がかかるため、熱意が続かないという状況もある。できる限りの猟をしてやっとのことで獣害の被害を抑える程度という状況なので後継者の育成が急務。

Q. 最近広まりつつある自伐型林業はどう？

A. 南丹市面積の87%が森林で、日吉町だけでも全体の間伐や整備をするのに33年かかる計算。到底組合だけでは管理できない。森林組合と、市民の草の根での管理である自伐型林業、そしてさらに小規模の林業が協働していかななくてはならない。そういう意味で、現状、森林整備への補助金が出ない枠組みになっているところも変えていく必要があるのではないか。



Q. いろいろな獣害の状況とその対策はどうなっている？

A. 南丹市では獣害の被害は高止まりの状態。豚コレラでイノシシが減ったとしても、バランス的に鹿が増える。サルは周辺の自治体が出資して作った「大丹波サル協議会」があり、丹波篠山から園部あたりの群れの動きは把握できているが、美山での状況は把握できていない。これまで個人で対策してくれていた人たちがどんどん現役から退いている状況もある。田畑の電柵等の管理をしっかりして、餌場にしないことも重要。



## 学生から：

塩貝さんの話の中で林業では何をどういう風にアピールをすればよいのかわからないという話があった。持続可能な地域づくりにはコミュニケーションが基礎であるという話を分科会で聞いたため、企業や団体、土の人、風の人など多様な人々が集まり、その立場の人にしか見えない視点をコミュニケーションによって共有することで新たな視点が生まれるのではないかと考える。

## 学生から：

集落での生活と農業と狩猟は繋がっていて、どれか一つでも欠けてしまっただけではないということが印象に残った。そのため、個別に問題や課題を解決していくことだけではなく、それぞれが交流し一つになって対策していくことが重要であると考え。また、私たち消費者も無関係ではなく意識を変えていく必要がある。そのために、少しでも農業や狩猟、自分の土地の管理などについて知ることや関わっていかねばいけない。



## 登壇者から：堀田 暢さん

森林組合の職員である私に、地域で農業に取り組んでいらっしゃる方や、これから地域に移住しようとする方、地域の課題解決のためにさまざまな取り組みをしておられる方と出会う機会を頂き、深く感謝申し上げます。「森林」や「林業」が、「地域」や「農業」と深く関わっていることに気付かされました。地域の森林を管理する上で、地域の文化や人びとの生活を尊重することは不可欠です。林業を優先し、地域の文化を無視したり、人びとの生活を脅かしたり、農業と相容れなかったりしては、持続的な森林・林業経営ができません。地域の一部であるという自覚と、地域の一員として私どもにしか果たせない役割があるという自負の両方を持たなければいけません。

私どもに求められることもたくさん発見できました。地域の森林をくまなく手入れできるように、森林・林業に携わるさまざまな立場の方と連携する必要があります。森林や林業への関心を高めるため、地域の方がたが森林に入ったり、林業を知ったりする機会を提供することも必要です。森林が災害から地域を守り、豊かな気候、環境を整える役割を果たし、地域の財産として未来へ受け継がれていくよう努めてまいります。

## 登壇者から：塩貝 孝之さん

今回のシンポジウムでは、企画段階から実行委員として関わらせていただきました。当日は、会場の運営、分科会、そしてパネルディスカッションの担当で、あっという間の一日でした。一番大きな感想は「時間が足りん」です。多くの参加者もそのように感じていただけていたのなら幸いです。

担当した『分科会②森林と農村：里山を守れるか?!』では現役の猟師として少しお話をさせていただきましたが、参加者の皆さんの熱量も大きく、それぞれが課題意識をもって参加いただきました。一見すると山林の持続性という大きな課題ですが、大きいからこそ、個の多種多様な活動をひとつの方向性をもって協働する意義を感じました。今日明日に答えや結果の出る分野ではありませんが、課題を共有しお互いを認め合う事が大事であり、その一歩を踏み出さなければ、解決策すら見出せないのではないのでしょうか。

森林・里山は、田畑や川、海に至るまでのすべての根源であり、放置することは出来ませんし、今、動かなければならない重要課題です。今回のシンポジウムでは、目的のひとつとしてきっかけ創りがありました。私たちの狙い通りに、多様な価値観が融合し新たな未来を耕せる風土が醸成される事を期待します。

鈴木 健太郎さん（一社・京都オーガニックアクション/有機農産物物流、兼ファシリテーター）  
& 児島 ひかるさん（京のべじ/有機農家）

資料 ①「有機農業をめぐる事情」 令和4年7月農林水産省 農産局農業対策環境課 P14~P17

内容 ・登壇者および参加者からの自己紹介と聞きたいことなどの共有  
・参加者からてた関心事項にそって、有機農業の定義、農法、販売や流通について登壇者から説明

ディスカッション

Q. 生産や流通におけるオーガニックの定義は？

A. 共通するものはないといってよい。国際的な有機栽培のガイドラインがあり、日本もそれに則って有機農産物を有機 JAS として認証を行っているが、国によって水や堆肥原料をどこまで制限するかなどに温度差があるのが実情。1年間科学的なものを入れていない田畑は転換中とされ、丸2年その状態であればそれ以降は有機の農地とされている。有機でも慣行でも作る人次第で、自然を相手にしていることや、値段や味、環境への配慮など、それぞれにいいものを作ろうとしていることには変わりない。分断はもったいない、共存が必要。

Q. 有機野菜を買いだいたいけど、近場で買えないのはなぜ？

A. 有機農産物の流通業をしていると、まさにその地域のものでその地域で得られないという状況が見えてくる。有機農業に多様性がありすぎて市場として大きくなりえないということや、生産、流通、消費の流れの中にアナログなコミュニケーションが必須であるという特異性があり、ジレンマを感じているところでもある。亀岡市がオーガニックビレッジ宣言を出したところだが、自治体が公共施設等での消費のために有機農産物を買収するというような動きが今後どこまで広がり得るのか、財政状況によってできる、できないも差が出るだろう。ニーズは高まっているはずなのでどこまでできるか、というところ。

Q. 日本の有機 JAS 規格はどうなのですか？

A. 有機 JAS の場合、有機的農薬や植物・食品が原料になっているものは OK だが、長年、有機農産物を扱っている会社や消費者グループの中には微生物農薬も不可としている場合もある。そもそも消費者運動、有機農業運動から始まった業界なので、顔が見える、信頼のある関係が土台としてあり、その中では規格などが必要なかったり、独自で決まりを作ったりしていることも多くある。有機 JAS 規格を取得するには、どの畑に何を投入したか、機械を有機とそうでないところとで混同して使っていないかなどの記録をきちんととる必要があり、デジタルでなく紙ベースで対応していくには非常に難しい。有機 JAS を取得している農家の倍以上の数が取得せず有機農業を実践しているという感覚で、「栽培期間中農薬不使用」と表示して販売しているケースも多い。大規模で少ない品目を作り、大規模に売っている場合は持っている強みになる。一方、個人のつながりで販売するならば理解が得られていることが前提なので、なくても問題ない。

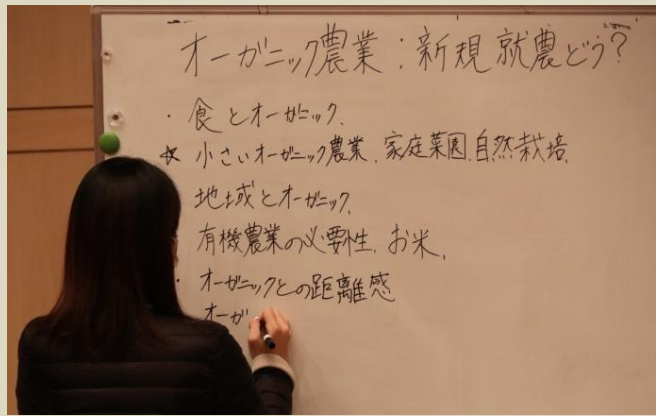
Q. これからオーガニック農業はどうなっていく？

Q. これからオーガニック農を始めたいけど、どうしたらよい？

A. 新規の場合、①栽培技術をどう学ぶか、②販路をどう確保するかが大きな課題。①に関してはこれまでマニュアルがなかったのが経験のある有機農家に弟子入りするという方法が多かったが、有機農業普及協会などの勉強会や書籍等で学ぶ機会も増えた。2年ほど地域の慣行農家で修業して、地域に馴染んでから有機に切り替えるなどもできる。②に関しては、自分の足で研修先や売り先からさらに紹介してもらう必要がある。今後、慣行農業のように、有機の生産が増え、マニュアル化ができれば相場も形成されていくと思うが、現状では個人でまずは販路を確保してから始める必要がある。

A. 農林水産省の「緑の食料システム戦略」にある有機農業の目標数値を見ると、今後、大規模産地が有機に転換していくなど大量生産型の有機が増えてくると予想される。顔が見える関係性を土台とした有機農業がそうでなくなると、人と人のつながりや、これまであった有機の思想などが失われていく危惧もある。私たちの幸福に本当につながるのか、現状に合わせてこれまでの運動の部分をアップデートして考えていかなくてはならない。





**学生から：**有機野菜など、まず前提の知識を知らない人がとても多いと聞いて、まずは色々な人に農業について知ってもらうことが、数多くある課題の中の1番最初に取り組むべき事だと思いました。その次に農村に人を増やすこともとても大事だと考えました。農業についての理解を色々な人に深めることは自分も貢献できたので、積極的に訴えていけたらなと思いました。

**学生から：**…有機野菜と人とのつながりについて興味があったため、今回の分科会③は大変有意義なものだった。その中でも大規模化に伴いオーガニック農業で培われた人と人とのつながりが希薄化するのではないかという意見は衝撃的なものであった。そのため、実際にオーガニック野菜を作る人、販売する人、購入する人に出会い、なぜオーガニックにこだわるのか、不便な点はないかなどを伺いたい。そしてオーガニック農業の活性化とこれまでの人同士の関係性維持にはこういった手段が重要になるかを考えたい。

### 登壇者から：児島 ひかるさん

新しく有機栽培を始めようとされる方は、販路と栽培方法の確立が不透明で、なかなかスタートしにくく、不安に思われている人が多いのだということ。それから、半農半Xで農業に関わりたい人は、外からの農薬流入や、畑の管理の仕方でも周辺の方と軋轢が生じないか心配されていたが、それは慣行栽培でもコミュニケーション不足だと生じるので、外から移住して農に携わる時は、地域の人とその農地と、周辺環境を守ってきてくれたことに対するリスペクトをもって、コミュニケーションをとって欲しいと思った。販路や栽培方法が明確になれば、もっと新規参入しやすくなるのでは。そういった地方版有機栽培マニュアルを市で作成してみてもどうだろうか。

### 登壇者から：鈴木 健太郎さん

今回のシンポジウムの中で大きなテーマの一つとなっていたのが、「土の人」と「風の人」という言葉で表現された、バックグラウンドや価値観が違う者同士がお互いの立ち位置を確認した上で建設的に話し合えるような座組を用意することだったと思う。有機農業を取り巻く状況もまさにこれに当てはまり、有機農家はいわゆる慣行農業のことを知らないし、一般の農家は逆に有機農業のことを知らない。「知らない」と言うことが大きな障壁となって、コミュニケーションの機会を失わせているので、「まずは知ることから」と言う座組を用意する必要がある。

分科会では、「オーガニック」というキーワードに関心を持った人が多数参加してくれたのだが、共通していたのは皆「オーガニック野菜」や「オーガニック農業」についての知識が圧倒的に不足していたことだった。栽培技術、販売方法、認証制度、商品表記のルール等、消費者も生産者も、都市の人も地域の人も、ぼんやりとは知っているものの、「実際どうなの？」という状況である、ということが今回大きな発見だった。なので分科会では「まずは知ることから」の話を中心にしたのだが、質問も多く、まだまだ時間が足りないくらいだった。この先は「さて、そんなオーガニックを地域の中でどう考えようか？」という話をする機会を作って行きたい。

吉田 宙斗さん（南丹市参農サポートセンター） & 前田 敦子（つむぎ）  
 ファシリテーター：高橋 博樹さん（なんたんこれから会議）

資料 なし

内容 ・テーマに沿った内容を内側の輪に座った人たちで始め、それを聞いている輪の外の人たちは、話がしたくなったらいつでも輪の中に入って会話に参加するという「金魚鉢（フィッシュボウル）」と呼ばれる話し合いの場作りの方法を用いて、実際に移住してどうか、地域の人はどう感じているか、“農”はどうやったら始められるか、仕事は？などについてのディスカッションが進められた。

ディスカッション

Q. 移住する際に不安はあった？

A. 誰も知らないところに来るということはかなり不安が大きい。一緒に来る家族に負担にならないかとか、集落のルールなど、村の人にとっては当たり前のことを一から聞いて学ぶ必要がある。南丹市では「集落の教科書」を作っているところも多く参考になる。地域との信頼関係を作ることがとても大事なので、移住する前に知り合いを作る、地域のキーパーソン的な人とつながるなどがよい。「お互いの協力関係」があって成り立っているというところがとても大切。おせっかいうまく利用してもらえたらよい。

Q. 移住者は最初、厳しいことをいわれやすいが・・・

A. 土の人からすると、住んでほしい、農業してほしいというのが本音。でも農業などは特に、本当に大変で投げ出す人も多く、最初に厳しく伝えておく必要がある。京都府の北には原発があり、新幹線の開発などの計画も上がっており、また、冬は本当に厳しい地域もある。そういうこともしっかりと調べて、相談して、十分考えてからきてほしい。何かがあっすぐ出て行ってしまう、ということは地元の人はできない。

Q. 南丹市はお試し移住はできますか？

A. 数カ月お試し移住ができる物件がいくつかあり、JRとの連携で利用者の通勤運賃が値引きになる取り組みをしている。ただ、いろんな人にひっきりなしに来られるのは地域にとっては不安も多いということや、本当に移住目的で利用しているのかの見極めが難しいということが課題。

A. 移住するまでの段階として、例えば、1年かけて田んぼに取り組みながら地域の人や、気候、暮らしの様子などを時間をかけて知ってもらうということは有効だと思うので今後、集落でやってみようかと相談している。

Q. どうやったら外の人にたくさんきてもらえるのか？

A. 農業体験などイベント的にすると、1回の事で終わってしまうので、まずは身内や知り合いに来てもらい楽しんでもらうと自然とひろまり、何度も来てくれるようになりやすい。「広報」という知らない人を呼んでくるイメージをもちやすいが、知り合いに声をかけ、口コミでつながっていくのが良いのではないかな。

Q. 移住して農を始めるには？

A. 農業の場合は、起業と同じなので、きちんとした事業計画や資金、経験があるか、「業」として本気でやるかどうかなどを問われるが、サポートがある。兼業で農をしたい場合は、全国探しても行政サポートはないのが普通だが、南丹市は「参農サポートセンター」を作り、家庭菜園や自給用の農でも相談できる窓口を行政が設けており、かなり画期的な取り組みが実施されている。

A. 農以外のお金の稼ぎ方として、飲食等のお店を考える人も多いが、市街化調整区域などの規制があって、難しいこともあるので、移住する先の法的な条件なども調べておくべき。





## 学生から：

南丹市のことを移住者や観光客にどのように知ってもらうか、という点が課題にあると感じた。前田さんは移住者を受け入れる姿勢である反面、南丹市のことをよく知ってからきてほしいとも話した。しかし、南丹市で日常となっている農業の光景や気づかない不便さを言語化することは難しく、受け入れる側と移住する側でコミュニケーションや相談ができる機会を設けることが良いのではと感じた。



## 登壇者から:吉田 宙斗さん

こんなにも多くの方が、農業に興味があり、また、田舎にある農業の問題などに向き合っているんだということに驚きました。

普段、業として農に携わっており、あくまで私にとって農はビジネスの手法の一つでしかないと思っており、その価値観は変わりません。

ですが、立場や見方が変われば地域の存続や生きがいに係る重要な課題であり、今後はそういった思いを持つ方々とも共存していかなければならないと思いました。

## ファシリテーターから：高橋 博樹さん

フォーマル感と、カジュアル感が織り混ざった心地よいシンポジウムになったと思います。

西川芳昭先生の基調講演で、風の人と土の人の相互作用というお話があり、大変共感しました。私自身は「風」の立場になることが多い。風の人と土の人では当然価値観が違い、意見の対立なども起こりやすいですが、それを受け入れる力（寛容）が大切。ややともすると、対立意見を避けてどちらかの意見に合わせたり、発言さえしない、という状況を作ってしまうがちです。風が、うまく土を柔らかくしてから掬い上げ、いつの間にか風を含んだふわふわの土になるのがよいなあと思いました。

分科会では、第4部会「農×移住：話したい人集まれ」のファシリテーターをさせていただきましたが、金魚鉢という手法で、参加者がいつでも会話に加われる場をつくりました。

徐々に外部の人も会話に入ってきてくれて、大阪との2拠点生活をしている方から、田舎や畑の楽しい使い方などの話も聞けました。まさに風と土の混ざり合いの場になった気がします。こんな交流の場をたくさん作っていくことで「風を含んだふわふわの土」を作っていくと、さらに良い風がやってくる気がします。ありがとうございました。

## 登壇者から：前田 敦子

今回のシンポジウムでは受付と第4分科会、パネルディスカッションのパネラーを担当しました。

シンポジウムには南丹市内外から多くの方が参加してくれ、終わった後も「良かった」という感想をよく聞いたので大成功だったのだと思いました。具体的な例としては、タイトルが良い、知っている人が出ている、西川先生の話が良かったなどです。来てくれた近所の人でも自分の身に置き換えて「嫁に来て数十年の私は風の人かな、土の人かなと考えた」と言っていました。

第4分科会の「農と移住についてのしゃべり場」ではファシリテーターの高橋さん(NPO法人テダス)、参農サポートセンターの吉田さん、私が入り、話したい人は自主的に3人と話す方式でした。はじめは皆さん緊張ぎみでしたが徐々に話したい人が出てきました。参加者は20人、市内外の人が半分ずつぐらいいて、話をした人も市内外が半々ぐらいでした。地元の人からは移住希望者への要望（環境などを調べてから来てほしいなど）、反対に移住希望者からは地元への要望（段階を踏んで移住するための交流の場がほしいなど）が話されました。「こういう対話の場所を都会でもつくってほしい」という意見がありました。

## パネルディスカッション

モデレーター：西川 芳昭さん

パネリスト：分科会①西村 寿さん ②塩貝 孝之さん ③鈴木 健太郎さん ④前田 敦子

内容 ・それぞれの分科会で話われた内容をパネリストが報告し、モデレーターの西川さんからいくつかの質問を投げかける形式で進められた。

Q. 分科会でコミュニケーションについて多く触れられたようだが、これまで実施されてきた、また未来に向けて実施していきたいコミュニケーションは？

**西村さん**：集落営農に関しては、機関紙を年20回ほど出し、作付け状況や害虫対策の話題、苗の発注などについて何が進んでいるのかが分かる内容にしている。また、NPOでは月1回新聞を地域に全戸配布(550戸)し、開催するイベントに関わってもらうことでコミュニケーションをとることができるようにしている。

**塩貝さん**：広大な森林を森林組合だけで管理していくのは不可能なので、自伐型林業や小規模林業者の育成をし、まさに今からコミュニケーションを取り、関係者がうまくやってくれるように住み分けをしていかななくてはならない。

**鈴木さん**：前のお二人は地域内での情報共有という話だと思うが、自分の場合、「風の人」としての役割を考えた時、知ることから始めることをしなければならなかった。状況を知り、課題が見えてくると選択肢も見えてくる。

**前田**：地域にとっては移住者には来てほしいが、良い環境ばかりを見るのではなく、地域の人とたくさん話をして大変なことも理解した上で来てほしいという話があった。地域の人とコミュニケーションをとり、「縁」をつくることでつながってくる 경우가よくある。

Q. 今回のテーマ、課題に関して、関心がない人も多くいる中、すそ野を広げるという意味でのコミュニケーションとしては何が考えられるか？

**前田**：野球でも草野球をする人がいて初めてプロ野球が盛り上がると言われているように、農に関しても小さい規模や多様性が増えることで全体を盛り上げていけるのではないかな。

**鈴木さん**：オーガニックとそれ例外のもの間に見えない壁がある。知りたいという欲求を満たす、知ってほしいことを広めるなど、壁をなくす取り組みをしていくべきだと思う。

**塩貝さん**：食に直結している農と違い、山や森林のこととなると、持っている山がどこか知らない、相続しても行ったこともない、関係があるのに興味が全くないという人が多い。狩猟にしても獲ってくれと言うけれど、自分では絶対に殺生したくない、という人も多い。まずは興味を持ってもらうところから始めなければならぬのでなかなかつらいところはあるが、取り組んでいかなければ。

**西村さん**：オーガニック農業について、全容が見えない分、心配なこともあって、よく知らない人がやりたいといってもすぐにOKと言える心情ではないのが現状。多様性が必要ということは理解しているが、今後集落としても克服していかなければならない課題だと考える。

Q  
最後のまとめを  
：

**前田**：農に関しては、移住して始めるなら、失敗したらやめてどこかに行ってしまうのではなく、成功するまであきらめずに継続してほしい。

**鈴木さん**：何世代も自治をしてきた土の中に入るプレッシャーはあるけれど、移住者としての役割を果たすことと同時に、コミュニケーションをとって、土の人とも風の人とも客観的に見ることができるよう、いろいろとアップデートしていけたらよいと思う。

**塩貝さん**：移住者にしか見えない視点というのがある。しがらみに左右されず、いろいろと取り組んでいる人達を融合させ、おずびつけていくことが必要だと思う。

**西村さん**：一生懸命、みんなと一緒にできる人は大いに歓迎。新たな人達に来てもらえるよう受け入れ側としてもいろいろと相談して準備していきたい。





#### 4. 参加者アンケートの集計

シンポジウムにご参加いただいた方のうち、44名の方から紙面及びオンラインでアンケートのご回答をいただきました。以下は項目ごとの集計です。

<b>お住まいはどちらですか</b>		<b>参加のきっかけは何ですか（重複回答あり）</b>	
南丹市内	19	地域の課題に関心がある	22
京都府内	8	地域の課題に取り組んでいる	8
その他	12	農業に携わっている	10
無回答	5	「農」を始めたい	4
		その他	8

このシンポジウムは何でお知りになりましたか（重複回答あり）

つむぎHP	2	チラシ	15	南丹市LINE	3	SMOUT	0
つむぎFB	5	知人より	20	南丹市CATV	0	その他	5
新聞	1	今日と明日HP	0	お知らせ南丹	2		

シンポジウムの内容についてお答えください。

	非常に満足	満足	満足しなかった	全く満足しなかった
基調講演	22	16	2	0
事例発表	11	28	1	0
テーマ別分科会	17	19	3	0
パネルディスカッション	8	21	0	0
全体	12	17	0	0

この分科会は今後の取組の参考となりましたか。

	非常に参考になった	参考になった	参考にならなかった	全く参考にならなかった
①南丹市の農業	5	4	0	0
②森林と農村	6	5	0	0
③オーガニック農業	9	4	0	0
④農×移住	3	5	0	0

シンポジウムの運委に関する以下の項目についてどのくらい満足されましたか

	非常に満足 1	2	3	満足しなかった 4	該当しない
日程	23	16	1	0	0
会場	17	15	5	2	0
昼食	14	10	5	0	7
申し込み方法	17	16	4	1	1

<ご意見>

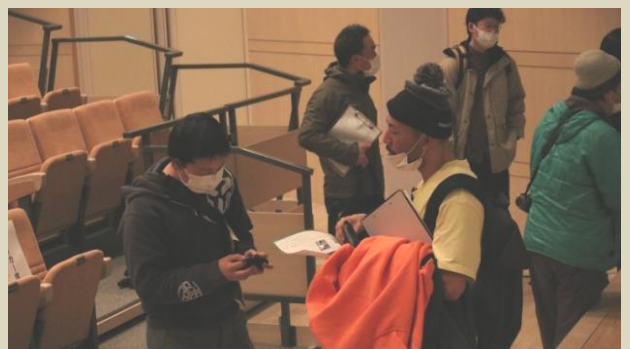
- ・初めてくる場所なので館内の位置関係がわからず、もう少し何をどこでやっているのか案内が欲しかった。
- ・市外者にとって遠いアクセス
- ・マイクの音なのか、お話が聞き取りにくかった。
- ・ホールがちょっと暑かった
- ・寒かった
- ・もっと野菜を多くしたメニューだとうれしかったです。

## このシンポジウムでは主にどのようなことを習得されましたか。

- ・ 林業を維持するための森林組合の役割。獣害を防ぐための考え方や南丹市の取り組み
- ・ 農や山の事や問題を人ごとにはいけない。一人一人が自分自身の問題として小さくても取り組まなければいけないと思いました。
- ・ それぞれの考え方には当たり前だが違いがあり、お互い話をする、考えを作っていくことが大切だということ。
- ・ 地域振興に欠かせない農林業、人材などについて広く学びました。
- ・ 風と土の人の考え方。地域おこしにおける心構え。山林に関する相談先。
- ・ 南丹市の移住についてリアルな現状を生の声で聞いたことです。
- ・ 新規就農の厳しさといろいろな人の意見を聞いたこと。
- ・ 参加者の多様性に驚いた。もう少し獣害の話を知りたかった。
- ・ 林業者を増やして森林の管理を進める必要がある。
- ・ 南丹市の現状、農が置かれている状況、地域の取り組み
- ・ 気に入らないことが起こり得ることを前提にする
- ・ 人との交流、大事
- ・ 農業、地域における現状と今後の課題
- ・ 土の方のリアルなお話を聞きました。
- ・ 地域を守る農業のやり方（法人化）
- ・ 熟議の重要性
- ・ 地元の方の想いと移住者側の視点。
- ・ 集落活性化のきっかけ作りの方法
- ・ 風の人、土の人という考え方
- ・ 有機農業について知ることができた。
- ・ 土と風の調和
- ・ 農業の法人化
- ・ 農業について考える時間を頂きました。
- ・ 森林環境税の使い道をどうするのか。
- ・ 移住に対する知識
- ・ 有機野菜の販路拡大の必要性

## 今後どのような取り組みをしたいですか。

- ・ 土と風の人がお互い本音を話せる場作り（今回もそうでしたが）
- ・ 地域で育った子供らが地域に関心を持つような学校連携も視野に入れた取組みにも期待しています。
- ・ 新規就農希望者のリードナーチャリング（顧客育成）のプロセスについて。どういうステップを踏んで未来の地域・農を支える人材を獲得していくか？
- ・ 小さな林業、里山あそび（都市との交流）、発信の仕方など広報のやり方をサポートしてほしい。
- ・ こんなことがしたい、を市役所のフォームに書き込めて、関係するイベント、人を紹介していただけること。
- ・ とても貴重な経験でした。具体的に30年～40年後どうなるか、子どもの未来はどうなっていくかのディスカッション。
- ・ 地域の農地をどのようなシステムで守っていくか、これまでのシステムがうまくいかなくなっている一方で、集落のまとまりや力も弱くなっている。
- ・ 農福連携で市が携わっていることはないと感じたので問い合わせの場所が欲しい。
- ・ 自然と共存して生活していくには。農業林業は工業的にしていくものではないので。
- ・ 収穫や選別の時だけ手伝いを必要とする方としたい人のマッチング
- ・ 2ヶ月くらいかけた実技も含めたまちづくりセミナー等あれば面白そう！
- ・ 半農半陶。どちらにも必須の「土」と共にある生活を送りたい。
- ・ 仲間作りができる機会のサポート
- ・ 農林水産省、JAとどう向き合うか？
- ・ 分科会や事例発表で紹介された実際に使用する用具等の展示
- ・ 耕作放棄地の活用について、各集落の困りごとを出し合う。
- ・ 耕作放棄地をわれわれで守っていくには
- ・ 6次化産業
- ・ 日常的な話し合いの場、知り合う場
- ・ 今回の内容を深く知りたい
- ・ スマート農業について
- ・ 後継者、人を育てる方法
- ・ マツタケ山の再生
- ・ スマート農業
- ・ 売る側や取り扱う側の取り組み





## シンポジウム全体についての感想をご記入ください。

- ・多様性の尊重という考えをベースに風の人と土の人が交わることができた、素晴らしいシンポジウムだったと思います。今すぐ移住を考えている者ではございませんが、シンポジウムを通じて展開された、地に足がついた議論には大いに発奮される思いでした。このような試みがあればまた伺いたいと思います。またお弁当がとても美味しかったです。
- ・綺麗事だけではないリアルな現場の意見が聞けたので良かったです。
- ・南丹市日吉町での開催でしたが色々な方面からの参加がある事に関心しました。テーマや内容が実践的なのがとても良かったです。
- ・基調講演で初めて土の人、風の人という考えを知りましたが、すごく納得のいく、腑に落ちるような考え方で、とても勉強になりました。
- ・ここから今から未来を耕す、耕し始める一步に参加できたと感じました。山も木も里も田畑も、もうこれからは誰のものでもなく、皆の者、関心のある人のものになっていってほしいです。難しいことがわからないのですが、子どもたちは空や海や川や山は皆のものであると信じて生きていってほしい。関心を持って。他人ごとにしなない、そう思いました。
- ・この規模のシンポジウムをこの品質でまとめられたことはすごいこと。長時間でしたがあっという間に過ぎた感じで充実感を持って帰れます。ありがとうございました。
- ・新たな一步を踏み出せたのではないのでしょうか？
- ・分科会で狩猟の話聞いたことが非常に新鮮で面白かったです。
- ・これからもつづけてほしい
- ・全体を通して良かった。
- ・農業の法人化について初めて話を聞いてよかった。
- ・スタッフの体験談などを説明され、それはそれで大いに有意義であったが、もう少し参加者の発言（質問）の時間もあったほうが良かったのでは。話したい人集まれということなので仕方ないが。
- ・午後からしかこれぞ残念でした。南丹市に多くの人に関心を持っておられることを知りました。
- ・地に足を付けた実践をしている方々のお話を聞かせていただき、ともに考えることができて良かったです。これからも自分ができることをやっていきたいと思いました。またこのような機会を作っていたら嬉しいです。
- ・土の人、風の人と両方の意見交換ができる貴重な場でした。南丹市の事が少しですが知ることができました。来たいと思いました。
- ・盛りだくさんの内容で、地域課題があることが改めて確認できたかな。
- ・面白かったです。
- ・これから役に立つと強く思った。
- ・法人の農業について初めて知れた。
- ・非常に勉強になる機会でした。ありがとうございました。



### 農×地域シンポジウム実行委員会メンバーから：池田 総子さん

2021年のつむぎの企画、「農×移住フィールド講座」に参加したことをきっかけに、ご縁がつながり昨年の春に南丹市に移住しました。長年、都会に暮らしてきて、居住する地域に愛着を感じるということはなく、ずっとそこで暮らしたいとも思えませんでした。「地域の一員として暮らす」とは、どういうことか。それを知るために移住1年生として実行委員会に参加させていただきました。

先輩移住者や地元の方々为爱着をもっておられる南丹を、未来につないでいくために活動されている。その様子を近くで見させていただき、この地域にご縁があって良かったなあ、そう思っています。これから私も風の人として、土に触れ、土の人に混ざってこの地域への愛着を深めていきたいです。「地域の一員として暮らす」ことを実践していきます。さあ、種を蒔こう！いろんな芽が出るのが楽しみです。

## 5. シンポジウムを終えて

シンポジウムを終えて、ご参加いただいた方たちから続々と「とても良い場だった」、「いろんな人と話ができた」、「みんなこんなに関心が高いのはすごいことだよな」、などのお声がけをいただきました。土の人と風の人がつながり合うことで作られてきた風土があり、これからさらにその対話やお互いへの寛容さを持つようになることが重要になっていくことを学びましたが、あの場では同時にそれが実践されていたようにも感じています。地域の事やこれからの事、農について、これだけ本気で考えている人がいる、こんなに思いを持った人がたくさんいる、それを感じることができ、力をもらえたね、と実行委員会のメンバーで振り返っています。また、このシンポジウムを通して、次にやること、やりたいことが見付き、そのためにつながっていける人たちの顔が見えた、そんな手ごたえも感じています。

シンポジウム開催にあたっては、本当に多くの方からのご理解とご協力をいただきました。まだタイトル

も決まっていない段階から快く相談を受けていただき、下見にもお越しくくださった講師の西川芳昭さん、ご経験や知見を惜しみなくご提供いただいた登壇者の皆さん、実行委員会からの相談にご対応いただく中で、私たちの課題への理解を深めてくださった行政や関連団体の皆さん、そして、当日の運営にご協力いただいた龍谷大学生の皆さんや地域有志の皆さん、改めて御礼申し上げます。そして何よりもこのシンポジウムにご参加いただいた南丹市および各地からお越しいただいた皆さまに、積極的なご参加をいただいたこと、また、とても和やかな雰囲気があふれる場を作っていたただけたことに心より感謝申し上げます。

個々の思いを尊重しつつ、対話をもって協働を模索していく、これからの農と地域はそんな風に皆で耕し、作っていくことができる—その一步を皆さんと一緒に踏み出すことができたと思います。ありがとうございました。

つおぎ・農×地域シンポジウム実行委員会一同

### <農×地域シンポジウム運営にご協力いただいた皆さま>

司会 コイケダカオさん

記録 田中 利彦さん

龍谷大学経済学部農業・資源経済学ゼミ 学生インターン

後藤 沙耶さん 佐々木 まこさん 滝内 志龍さん

運営サポート

荻原 亜由美さん 下田 真徳さん 高橋 博樹さん 田畑 昇悟さん 樋口 浩之さん

藤原 よう子さん 用澤 菜奈子さん 吉田 宙斗さん 米澤 弥央さん

### <チラシ・ポスターイラスト&デザイン>

uma studio

### <農×地域シンポジウム実行委員会>

池田 総子 塩貝 孝之 下間 康広 鈴木 健太郎 友前 尚子

ドワイヤー はづき 前田 敦子





# 丹波

## 農業と地域 持続可能な在り方探る

農地の担い手が不足する中、農業と地域の持続可能な在り方を探る「農×地域シンポジウム 未来を耕す」が18日、南丹市日吉町の市日吉生涯学習センターで開かれる。地元農家や家庭菜園を始めた移住者、研究者などが登壇し、就農支援や有機農業について経験や課題を共有する。

同市の移住サポート団体「つむぎ」のメンバーらでつくる実行委員会が主催。市内では農業の多様な生き残り策が図られるが、互いの活動が知られていないとして、関係者が出会う場を企画した。

農村の振興に詳しい、龍谷大の西川芳昭教授は、地元の人と移住者などとの協働



農と地域の将来について考えるシンポジウムをアピールする実行委員ら(南丹市園部町)

18日、南丹でシンポ

について講演する。美山町下と園部町西本梅地区の農家や獣害対策を担う猟友会の発表、つむぎが移住希望者向けに催した就農講座の報告もある。同町の有機農家は栽培方法に加え、販路の展望についても説明する。

実行委員のドワイヤーはづきさん(43)と友前尚子さん(48)は「多様性を認め合いながら、農のビジョンを考える場にした」と話している。

午前10時〜午後4時。市民千円、一般1500円、学生無料。定員約100人。参加は要予約で、つむぎのホームページが、メール:sunugi\_nantan@gmail.com。 (田中恒輝)

2023年(令和5年)2月19日 日曜日

## 農業と地域 持続可能性探る

日吉でシンポ 住民交流の大切さ訴え



地域農業の未来について意見を交わした討論会(南丹市日吉町・市日吉生涯学習センター)

農業と地域の持続可能な在り方を探るシンポジウムが18日、南丹市日吉町の市日吉生涯学習センターであった。参加者は分科会やパネル討論を通じ、地

人ら約130人が市内外から集まった。パネル討論では、農村開発を研究する龍谷大の西川芳昭教授が進行役を務め、農村振興に欠かせない「ミニ

ケーションについて市路拡大が大きな鍵になることがある」と指内の専門家ら4人に尋ねた。有機作物の流通場を知ってもらう地道な活動が大事」と訴えた。つむぎの前田敦子代表は「有機農業に携わる農家は販路拡充が家探しの影響を懸念している」と指摘した。

シンポジウムでは西川教授による講演のほか、林業、地域振興のほかに、地域振興な

(町塚葵)

### 新聞記事

上：2月10日(金)  
京都新聞丹波地域版  
「農業と地域 持続可能な在り方探る 18日、南丹でシンポ」

左：2月19日(日)  
京都新聞丹波地域版  
「農業と地域 持続可能性探る 日吉でシンポ 住民交流の大切さ訴え」





農 × 地域シンポジウム

# 未来を耕す

～これからの農と地域を考える～

豊かな森、田畑、里山の暮らしが息づくこの南丹。

5年後、10年後、そしてその先、どんな風景にしていきたいですか。

地域の人も、移り住む人も、訪れる人たちも、

春を待つこの日、農と地域について一緒に考えてみませんか。



2023

2/18土

10:00~16:00

開場 9:30

会場：南丹市日吉生涯学習センター 遊 you ひよし

南丹市民 1,000円  
一般 1,500円  
学生無料



申し込みフォーム

参加申し込みはこちらのコードから、またはE-mailにて [tsumugi.nantan@gmail.com](mailto:tsumugi.nantan@gmail.com) までお名前とご連絡先をご送信下さい。

要申込!  
2/15(水)締切

午前の部

基調講演

『『風の人』の目を見た農と地域の未来』  
西川 芳昭さん (龍谷大学・経済学部教授)

事例発表

地域からの3つの事例

午後の部

テーマ別分科会

- ① 南丹市の農業
- ② 森林と農村
- ③ オーガニック農業
- ④ 農 × 移住

パネルディスカッション

「これからの農と地域」

内容および  
登壇者の  
詳細は裏面へ

主催：つむぎ・農 × 地域シンポジウム実行委員会 後援：南丹市、京都新聞、京都信用金庫  
協力：なんたんこれから会議  
この事業は「令和4年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。



午前の部

基調講演

10:10～ ホール



『『風の人』の目で見た農と地域の未来』

講師：西川 芳昭 (にしかわよしあき) さん  
 龍谷大学教授 (農業・資源経済学 / 民際学)  
 地域のよりよい生活を実現するための、「土の人」(ずっと住んでいる人)と「風の人」(外から移り住む人・訪れる人)との協働について、地域資源を理解し、活用する視点から考えます。

<プロフィール>

1960年奈良県のタマネギの採種農家に生まれる。京都大学農学部農林生物学科卒業、バーミンガム大学生物学研究所 / 公共政策研究科修了。国内及び海外数十か国で農村振興・参加型資源管理について調査研究と行政・NGO等への指導を実施。国際協力事業団(現国際協力機構)・農林水産省・名古屋大学等を経て現職。

単著：『地域文化開発論』(九州大学出版会)、『食と農の知識論』(東信堂)、編著：『生物多様性を育む食と農』(コモンズ)、『タネとヒト 生物文化多様性の視点から』(農山漁村文化協会)、共編著：『地域の振興』(アジア経済研究所)等

事例発表

11:10～ ホール

- 「下区の農業の変化と現状」 澤田 利通 さん (美山町下農事組合長)
- 「めざせ！農家あぜみち会議」 下間 康広 さん (園部町南八田)
- 「農 × 移住フィールド講座」 ドワイヤーはづき (つむぎ)

テーマ別分科会

13:00～ ホール 会議室1 会議室2 リハーサル室

1 南丹市の農業：地域 × 行政

西村 寿 さん (摩気高山の郷振興会)  
 & 南丹市農業推進課  
 南丹市の農業の現状と今後の展開について、地域と行政の視点からのお話です。

2 森林と農村：里山を守れるか？！

堀田 暢 さん (日吉町森林組合)  
 & 塩貝 孝之 さん (南丹市猟友会)  
 農村と密接に関わる森林と獣害について、南丹市の現状と課題を現役のフォレスター&ハンターが語ります。

3 オーガニック農業：新規就農でどう？

鈴木 健太郎 さん (一社・京都オーガニックアクション / 有機農産物流通)  
 & 児島 ひかる さん (京のべじ / 有機農家)  
 南丹市での有機農業は？有機での栽培や認証制度、販路開拓や流通の選択肢など、生の情報を共有しつつ、これからの展望を考えます。

4 農 × 移住：話したい人集まれ！

南丹市参農サポートセンター & つむぎ  
 ファシリテーター：高橋 博樹 さん (なんたんこれから会議)  
 新たに“農”を始めたい方、ここが知りたい！ここが不安！などなんでも話せる場です。サポートしたい地域の方も歓迎！

パネルディスカッション

14:50～ 「これからの農と地域」

ホール

モデレーター：西川 芳昭 さん  
 パネリスト：各分科会より

農 × 地域シンポジウム

未来を耕す ~これからの農と地域を考える~



2023  
 2/18 土  
 10:00~16:00  
 開場 9:30

お問合せ

つむぎ・農 × 地域シンポジウム実行委員会

✉ tsumugi.nantan@gmail.com  
 ☎ 0771-74-1327 / 090-3623-1828  
 HP https://tsumugi-kyoto.net/

※感染症等の状況により内容の変更が生じる可能性があります。  
 ※当日は、会場での検温、手指の消毒、マスクの着用にご協力ください。



会場ご案内

南丹市日吉生涯学習センター 遊 you ひよし

京都府南丹市日吉町保野田長通 24

- ▶ 駐車場 (無料) あり
- ▶ JR 山陰線「鍼灸大学前」駅徒歩1分  
 ※電車の本数が限られています。ご注意ください。
- ▶ 昼食は、会場販売のお弁当、最寄りのコンビニエンスストアをご利用又はご持参ください。

つむぎ・農×地域シンポジウム実行委員会

TSUMUGI

つむぎ

E - mail : [tsumugi.nantan@gmail.com](mailto:tsumugi.nantan@gmail.com)

HP : <https://tsumugi-kyoto.net/>

この事業には、「令和4年度京都府地域交響プロジェクト交付金」を活用しています。